

# 幼児の「環境」と児童の「生活科」における 幼小接続に関する研究

—糸電話の制作・遊び活動を通して—

仲井 勝巳  
(教育学科)

大内田 真理  
(教育学科)

辻 誠  
(教育学科非常勤講師)

本研究は、幼稚園（5歳児）と小学校（1年生・生活科）における特別授業として、糸電話の制作と遊び活動の実践を行ない、この活動が幼小接続の教材として適しているかを考察し、検証したものである。その結果、小学校の児童は活動によって糸電話の仕組みを理解することができ、お互いが聞こえやすいように話し合い、自分たちで調整しながら操作することができていた。それに対して、幼稚園の幼児は教員の言葉がけを受けることで、聞こえることに気づき、活動を楽しんでいたが、自らの体験をもとに糸電話の仕組みについての理解が難しいことが明らかになった。

幼稚園における実践結果からは、この活動が幼児にとって「保育内容5領域」、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」、「主体的・対話的な深い学び」の実現に関わる活動であること、また、小学校における実践結果からも本教材の育成目標である三つの資質・能力の【知識・技能の基礎】、【思考力・判断力・表現力等の基礎】、【学びに向かう力・人間性等】が育つ教材となりうると考えられた。よって、この活動が幼小接続を滑らかにする手立ての一つとして有効な教材であると評価できた。

キーワード：幼児、児童、環境、生活科、幼小接続、糸電話

## 1. はじめに

辻・浦田・仲井・伊藤（2025）は、保育教材「糸電話制作と遊び活動」の指導法を工夫することで「子どもの意見表明」形成の基盤になりえること、また、5歳児後半期の保育実践に相応しい活動となりえることを示した。そして、5歳後半期の教材としてふさわしく、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」のうち、特に「言葉による伝え合い」「豊かな感性と表現」といった5領域における「言葉」や「表現」にあたる視点からの子どもの姿が確認できる活動になることを示唆した。さらに糸電話は小学校での教科教材でもあることから、5歳児が小学校に向かうアプローチ期にふさわしく、モデル施行期間を経て今後本格化される「保幼小の架け橋プログラム」事業にも対応が可能な教材でもあることを挙げた。そこで、この研究内容を継続し、幼稚園5歳児と小学校1年生に着目した糸電話の制作や遊びについて実践を行うことにした。

幼稚園教育要領（文部科学省、平成29年告

示）では、幼稚園では園の生活を通して生きる力の基礎を育むことが求められ、小学校以降の発達を見通しながら、幼児期において育てたい資質・能力を教育することが大切であることが示される。その資質・能力とは、「知識及び技能の基礎」「思考力、判断力、表現力等の基礎」「学びに向かう力、人間性等」であり、保育内容5領域のねらい及び内容に基づく活動全体によって育まれる。その具体的な姿として「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が示されている。

幼児期の教育と小学校教育の学びの連続性から考えると、幼稚園では「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」へ向かう教育を行い、小学校では「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の視点から教育が考えられる。しかし、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」は、到達すべき目標として個別に指導するものではなく、あくまでも幼児の育ちの指標とされている。幼児期の教育は環境を通して行い、幼児の自発的な活動となる遊びを中心としたなかで、

幼児一人一人の発達に即し、これらの姿へと育っていくため、すべての幼児が同じように見られる姿ではない。

幼稚園と小学校ではそれぞれに教育の特徴があり、幼稚園では、幼児の遊びや生活を通して、保育内容5領域が示すねらいを総合的に達成されると考えられている。小学校では、授業を通して系統的に学習することで、到達目標が達成されると考えられている。このように幼稚園と小学校では教育方法が異なるため、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」からのイメージする姿は、幼稚園教諭と小学校教諭では異なることが考えられる。その違いを教員同士が共有し、幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続を図るために、「幼保小架け橋プログラム」「アプローチプログラム」「スタートカリキュラム」等の取り組みが行われている。

「幼保小の架け橋プログラム」とは、以下の取組のことである。

『架け橋期』（5歳児から小学生1年生までの2年間）の教育の充実を図るため、幼保小の先生はもとより、保護者や地域住民等の子供と関わる大人が立場の違いを超えて自分事として連携・協働し、子供一人一人の多様性に配慮した上で、全ての子供に学びや生活の基盤を育むことを目指す取組（文部科学省、2024a）

その取組では、『架け橋期』のカリキュラムがあり、「幼保小の先生が、共通の視点を持ちながら、相互の教育内容や教育方法の充実を図るため、協働して作成」（文部科学省、2024a）されている。「アプローチカリキュラム」とは、「小学校の先取りの教育ではなく、小学校以降の教育を見通しながら、その基盤となる資質・能力を育成していくことを踏まえて教育活動を実施するためのカリキュラム」（文部科学省、2024a）である。

「スタートカリキュラム」とは、「小学校へ入学した子供が、幼稚園・保育所・認定こども園などの遊びや生活を通じた学びと育ちを基礎と

して、主体的に自己を発揮し、新しい学校生活を創り出していくためのカリキュラム」（文部科学省、2024a）のことである。「スタートカリキュラム」については、小学校学習指導要領解説総則編で「特に、小学校の入学当初においては、幼児期の遊びを通じた総合的な指導を通じて育まれてきたことが、各教科等における学習に円滑に接続されるよう、スタートカリキュラムを児童や学校、地域の実情を踏まえて編成し、その中で、生活科を中心に、合科的・関連的な指導や弾力的な時間割の設定など、指導の工夫や指導計画の作成を行うことが求められる」（文部科学省、2024b）と示される。

小学校の生活科は、幼児教育と小学校教育の接続のカギをにぎる教科である。生活科の最終的な目標は、児童が独り立ちするための基礎を育成することとされている。現行の小学校学習指導要領（平成29年告示）における生活科の目標は次の通りである。

具体的な活動や体験を通して、身近な生活に関わる見方・考え方を生かし、自立し生活を豊かにしていくための資質・能力を次のとおり育成することを目指す。(1) 活動や体験の過程において、自分自身、身近な人々、社会及び自然の特徴やよさ、それらの関わり等に気付くとともに、生活上必要な習慣や技能を身に付けるようにする。(2) 身近な人々、社会及び自然を自分との関わりで捉え、自分自身や自分の生活について考え、表現することができるようにする。(3) 身近な人々、社会及び自然に自ら働きかけ、意欲や自信をもって学んだり生活を豊かにしたりしようとする態度を養う。

このように、生活科の目標は児童の社会的な自立を目標として、自然環境や社会環境を理解し、適応する技能を育てる内容であると読み取ることができる。この教育目標を具現化する授業における目標として、「自分の考えや思いを他者に伝えられる」をその一つとして設定することは重要であると考えられる。

さらに、幼小接続という視点からの記述が次のようにある。

生活科 指導計画の作成と内容の取り扱い  
(3) 国語科・音楽科・図画工作科など他教科等との関連を積極的に図り、指導の効果を高めるようにすること。特に、第1学年当初においては、生活科を中心とした合科的な指導を行うなどの工夫をすること。

つまり、幼稚園・小学校の両方のカリキュラムを円滑に接続することが生活科の明確な目標として示されている。

以上のことから、以前に取り組んだ幼稚園の糸電話の実践を踏まえ、小学校学習指導要領(平成29年告示)の生活科に明記されている目標に則って、児童の学習理解に寄与するような授業を実施する。そして、児童がねらいや生活科の目標に向かう際に、生活科が目指す幼小接続、教科横断的な視点を含めて検証していく。

## 2. 研究方法

幼稚園(5歳児)と小学校(1年生)の事例をもとに、幼小接続の視点から整理する。なお、幼稚園(5歳児)の事例は、辻ら(2025)が実施した「糸電話制作と遊び活動」の事例を、さらに詳細に分析することにした。また、小学校の指導経験がある大学教員が生活科の目標に照らし合わせて特別授業を実施した。そして、児童の振り返り、学習の様子、映像を分析し、共同研究者で、幼稚園教育要領のねらい、小学校学習指導要領の目標に適切しているかどうか、幼小接続に適したプログラムかどうかを協議し、明らかにしていく。本研究は、倫理的配慮を行い、協力校の承諾、許可を得て実施した。

## 3. 幼稚園(5歳児)の事例

### 3-1. 幼稚園(5歳児)の実践概要

幼稚園(5歳児)の特別保育の概要は、次の通りである。

場所：京都市内のA幼稚園

対象：5歳児クラス29名

日時：X年10月10日

午前10：10～11：00 晴れ

実施者：大学教員1名、大学生3名、幼稚園教員1名

準備物：紙コップ(幼児数×大小1個ずつ)・たこ糸(幼児数×80センチ)・ゼムクリップ・セロハンテープ・ハサミ・カラーマーカー・丸いカラーシール

保育のねらい：

[ねらい1] 実施者や友達と一緒に糸電話を作ることに楽しんで取り組む。(5領域の「健康」・「表現」・「人間関係」ねらいと内容より選出)

[ねらい2] 糸電話の音が伝わる仕組みに興味や関心をもつ。(5領域の「環境」ねらいと内容より選出)

[ねらい3] 友達の声を聞いたり話したりすることを楽しむ(5領域の「言葉」ねらいと内容より選出)

活動の流れ：

糸電話をテーマにした絵本の読み聞かせをし、糸電話の制作と遊び活動をした。読み聞かせは大学生が、制作と遊び方の指導は大学教員が実施した。

### 3-2. 幼稚園(5歳児)の事例結果と考察

幼稚園では、幼児は遊びを通して学んでいる。その学びを、本研究では、小学校との科目とのつながりを5領域で考察することにより、学びの接続について検討していく。よって、時系列に沿って活動の経緯と5領域との関連について記述した(表1)。

#### (1) 保育内容5領域について

主な活動内容は、①絵本『もしもしモモン』の読み聞かせをみる、②紙コップ(大小1個ずつ)にシールを貼る、③自分のマークや好きな絵を描く、④友達と2人組になり、セロハンテープで紙コップと糸を繋げる、⑤2人組になり糸電話で話す、⑥大学教員の2つの質問に幼児が答える、⑦活動の振り返りをする、の7項

目である。

幼児期の教育は、ひとつの遊びのなかに保育内容5領域は相互に関連し合っているため、ここからここまでの領域とはっきり分けることは難しい。しかし、小学校教育の教科との関連を考えるために、ここでは活動内容①から⑦までを保育内容5領域から遊びを通した学びについて考察する。

### ①絵本『もしもしモモン』の読み聞かせをみる

絵本『もしもしモモン』は、主人公のモモンがお父さんの代わりに連絡係を引き受けることになり、糸電話を使って連絡をするというあらすじである。絵本の話聞いた後に、大学教員がけん玉を糸電話に見立て大学生とけん玉の糸電話で話してみたが、声が聞こえない。そこで、大学教員が幼児にどうして声が聞こえないのかを尋ねた。すると、幼児からは「つながってるから」「あながあいてないから」と答えが返ってきた。幼児なりにこれまでの経験から考えだされた答えだと推察される。

次に、大学教員が「大きい紙コップの糸電話と小さい紙コップの糸電話はどちらがよく聞こえるか」と問いかけた。すると、多数の幼児が「おおきいほうがよくきこえる」と答えた。さらに、「なぜ、そう思うか」という問いには、幼児は「おおきいかみコップやからさ」「おおきいし、めっちゃきこえる」「おおきすぎるから」と答えた。これらの発話から、大きい紙コップだから大きな声が聞こえる、小さい紙コップだから小さい声が聞こえる、紙コップの大きさで聞こえる声の大きさは同じだと考えたのではないかと推察する。これらは、糸電話の仕組みを考えているため「環境」と関連する。

### ②紙コップ（大小1個ずつ）にシールを貼る

大学教員等から幼児へ大小1つずつの紙コップが配られ、幼児はその紙コップを受け取った。幼児は絵本『もしもしモモン』をみたことで、これから紙コップを使って糸電話を作るということを理解している。幼児は紙コップや糸電話に興味をもち、それぞれの方法で紙コップ

に関わった。糸電話に興味がある幼児は、紙コップを片方の耳に当てて話を聞く仕草をしたり、紙コップを口に当てて「わーわー」と話してみたり、口の前に当てていた紙コップを揺らして、声が揺れるのを楽しんだりしていた。また、紙コップという物に興味がある幼児は、大きいコップに小さいコップを積んで高くしたり、大小2つの紙コップを頭に付けて角のように見立てたりしていた。このように身近な物と関わるという姿は「環境」「表現」と関連する。

紙コップにシールを貼り、友達同士でそれを見せ合って「これみて、わたしの」「いっしょじゃん」（同じ色のシールを貼っていた）と喜びを共感する姿がみられた。シールを貼って自分の思いを表現することは「表現」になるが、その気持ちを言葉でも表現しているため「言葉」とも関連している。また、自分の思いを友達へ伝え、その喜びを友達と共感するというのは「人間関係」とも関連する。また、幼児がシールを貼り終えて、全員で見せる場面では、「やったー」「かわいいー」と声をあげるという幼児の姿は「言葉」と「表現」に関連している。

### ③自分のマークや好きな絵を描く

紙コップ（大小1個ずつ）にペンを使って、自分のマークや好きな絵を描くためには、指先の巧緻性が必要になる。そして、立体的な紙コップの側面に絵を描く時には、左手で紙コップが動かないように固定をしたり、自分の胸に紙コップを押し当てて紙コップを固定したりしていた。このように指先や体全体の運動については「健康」と関連している。

幼児はペンを使ってポケモン、数字、パンダ、ハート（マーク）、ジグザグ線の模様、クロミちゃん等、自分の思いを好きな絵やマークで表現していた。これは「表現」「環境」と関連する。絵やマークを描き終えると、幼児は保育者等へ「みて」「みて」と言い、自分が描いたマークや絵を見せ「ハート」「クロミちゃん」等説明をした。それに対して保育者等から認める言葉を掛けられると、幼児は満足そうな表情

をしていた。このような姿は「人間関係」「言葉」と関連する。

#### ④友達と2人組になり、セロハンテープで紙コップと糸を繋げる

セロハンテープを4枚貼るという場面では、「おれ5こ、500こ・・・、60000000こ」と数の多さを競うように数字を言い合う幼児がいた。また、セロハンテープを何枚貼るのが分からなくなった幼児は、大学教員に「なんこ？」と尋ね、大学教員が4本の指を見せた。すると、幼児は「4まい」と答えて、セロハンテープを貼っていた。数は「環境」と関連する。

指先を使ってテープ台からセロハンテープを切り、切ったセロハンテープで紙コップに糸を貼り付ける。ほとんどの幼児が、指先の力加減を調整することができていた。しかし、それが難しい幼児は友達に手伝ってもらっていた。指先の巧緻性は「健康」と関連し、思いやりをもって友達と関わる姿は「人間関係」と関連する。

そして、2人組になった友達と協力しながらセロハンテープを使って、糸と紙コップを繋げて2人で1つの糸電話を完成させた。この活動は「人間関係」と関連する。

#### ⑤2人組になり、作った糸電話で友達と話す

友達と糸電話で遊ぶ前に話す時の声の大きさについて、大学教員が「0は静かにする」「1は小さな声で『もしもし』の声」「2は近くの友達に『今日の朝は何食べた』と話す声」「3はみんなの前で発表する声」という数字と音量を示したカードを幼児へ提示をした。幼児が話を聞く時は「0は静かにする」、糸電話で友達と話す時には「1は小さな声で『もしもし』の声」で話すという約束をした。

教員が話す時には「0は静かにする」という言葉をかけると、幼児は静かに話を聞いていたため、この約束は理解していたと考えられる。しかし、友達と糸電話で話す時には、「1は小さな声で『もしもし』の声」ではなく、大きな

声で話していた幼児がいた。大きな声で話していた幼児は、「1は小さな声で『もしもし』の声」「2は近くの友達に『今日の朝は何食べた』と話す声」の違いを理解していなかったように見えた。5歳児では、「小さな声で『もしもし』の声」と「近くの友達に『今日の朝は何食べた』と話す声」という場面によって音量が変わることや、1と2の数の違いを理解するのは難しいかもしれない。約束事については「人間関係」と関連し、数に関することは「環境」と関連する。

できあがった糸電話で遊ぶ場面では、2人ともが紙コップを耳に当てて聞いていたため、どちらも声が聞こえないと言った。友達と糸電話で遊ぶ時には糸電話で話す幼児と、それを聞く幼児で役割分担をしなければならない。友達同士で役割分担をして、自分の役割を理解して自分で考えて行動するというのは「人間関係」にあたる。

また、糸電話で話している幼児は正面を向いているため、聞いている幼児の顔を見て話すことができる。しかし、聞いている幼児は、糸電話の糸が自分の体に触れないように横向きになって話を聞いているため、話している友達の顔を見ることができない。そのため、友達の話を聞く幼児は、話す友達がいつ話すのか、いつ聞くのか、というタイミングを予想しなければならない。お互いに友達の気持ちや行動を考えながら、遊ぶことによって友達の声を聞くことができる。そこで、友達の声が聞こえるととても嬉しくなる。友達の声が聞こえた瞬間、跳びあがって喜ぶという幼児の姿がみられた。役割分担のなかで自分の役割を理解して、自分で考えて行動し、友達の思いに気づき、友達と協力することは「人間関係」となる。跳びあがって喜びを表現するというのは「表現」と関連する。

そして、友達と糸電話で話す、聞くの役割を交替する時に、紙コップを口から耳へ、耳から口へと移動する。それまでは糸電話の糸をピンと張っていたが、紙コップの移動の瞬間に糸電話の糸が垂れ下がってしまう。糸が垂れ下が

り、声が聞けなくなっても話し続ける幼児は、「なにいつてるか、わからない」と言った。糸電話で友達の声を聞くためには、お互いが協力して距離をとり、糸電話の糸をピンと張る状態を保たなければならない。糸電話の仕組みを理解するという事は「環境」になり、友達同士で協力するという事は「人間関係」にあたる。

そして、糸電話は糸をピンと張り、かつ自分の体の方向がその糸に触れないように、自分の体も調整しなければならない。その際、保育者が糸電話の糸に幼児の体が触れないように、その幼児の体の向きを変えるように援助をしていた。このように糸電話の仕組みを理解することは「環境」であり、状況に合わせて自分の体を動かすことは「健康」にあたる。

#### ⑥大学教員の2つの質問に幼児が答える

1つ目は、大学教員から「ピンと張っている糸を指でつまむとどうなるか」という問いがあった。それに対して、幼児からは友達の声が聞こえた、聞こえなかったという2つの答えがあった。糸電話の話聞く幼児は、横を向きながら話を聞くため、指で糸をつまむことが難しい。しかし、保育者等が糸電話の糸をつまむという援助をすることで、その状況を体験することができる。幼児同士ではその状況を体験することが難しかったため聞こえる、聞こえないと2つの答えがでたのではないかと推察する。

2つ目は、大学教員から「大きい紙コップと小さい紙コップではどっちがよく聞こえたか」という問いがあった。それに対して幼児からは「おおきいほう」「ちいさいほう」と2つの答えがあった。友達と一緒に糸電話で遊んで、大きい紙コップと小さい紙コップでは声の伝わり方が違った、同じではなかったことに気づいた。

大学教員からの2つの質問は、糸電話の仕組みに関することになるため「環境」と関連する。

#### ⑦活動の振り返りをする

活動の最後の振り返りでは、大学教員から

「お友達と一緒に糸電話で遊んで、お友達の声が伝わって、自分の声が伝わってどんな気持ちになりましたか」という問いがあった。それに対して幼児からは「うれしかった」「おともだちのこえがきこえてうれしかった」と答えがあった。さらに、大学教員から、友達とどのような話をしたかという問いがあった。幼児からは「すきなどうぶつ」「もしもし」「おもったこと」「おえかき、たのしかった」と答えがあった。これらの姿は「言葉」「表現」に関連する。

#### (2) 育みたい資質・能力について

活動内容を育みたい資質・能力から考察する。

「知識及び技能の基礎」は「豊かな体験を通じて、感じたり、気付いたり、分かったり、できるようになったりする」ことである。糸電話は声を伝えることができることが分かった、糸電話で友達と話す、友達の話を聞くことができるようになった。

「思考力、判断力、表現力等の基礎」は「気付いたことや、できるようになったことを使い、考えたり、試したり、工夫したり、表現したりする」ことである。糸電話を作って遊ぶという活動は、友達の声が聞こえるように糸電話の糸をピンと張るにはどうしたらよいかを考えたり、糸をピンと張るためには友達と離れてみたりした。そして、友達の声が聞こえたら嬉しいということを全員へ伝えた。

「学びに向う力、人間性等」は「心情、意欲、態度が育つ中で、よりよい生活を営もうとする」ことである。幼児期の教育では、心情・意欲・態度を育むことを大切にしている。心情・意欲とは、楽しい、面白いと心を動かされ、興味や関心を持ち、やってみたいということである。態度とは、最後までやり遂げる、粘り強く取り組む、積極的に工夫する、友達と協力する等のことである。この心情・意欲・態度を育むことが、学びに向う力や、よりよい生活を営もうとする力へとつながる。

糸電話を作って遊ぶという活動は、友達の声が聞こえたら嬉しいと心が動き、もう1回糸電

話を作ってみたい、もっと絵を描きたいという意欲となった。そして、友達と一緒に糸電話を作り、友達が困っていたら手伝う、友達と話す、友達の話を聞くという役割を理解して、友達の声が聞こえるまでやり遂げようとした。

### (3) 幼児期の終わりまでに育ってほしい姿

「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」は、5歳児後半になると突然現れる姿ではなく、それまでの経験の積み重ねによるものである。ここでは、短時間の活動ではあるが、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」につながると考えられる姿を取りあげる。

紙コップを使って糸電話を作り、作った糸電話で友達と遊ぶという活動において、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」は「協同性」「思考力の芽生え」「言葉による伝え合い」「豊かな感性と表現」が関連すると考えられる。

「協同性」は、友達と2人組になり、1つの糸電話を完成させるという目的に向かって、それぞれ自分の担当する部分を完成させた。困っている友達がいれば手伝ってあげ、互いに完成を喜び合い、完成した糸電話で一緒に遊ぶことに見出せる。

「思考力の芽生え」は、紙コップや糸電話に興味をもち、どうしたら糸電話で友達の声が聞こえるかを考え、繰り返しいろいろな方法を試しながら、遊ぶことを楽しむことに見出せる。

「言葉による伝え合い」は、糸電話を使って好きな動物、楽しかったこと、思ったこと等、自分の思いを話したり、友達の思いを聞いたり、言葉で伝え合うことに見出せる。

「豊かな感性と表現」は、糸電話で友達の声が聞こえた瞬間に跳びあがって喜びを表現し、振り返りの時間には、「おともだちのこえがきこえてうれしかった」とクラス全員に嬉しかったことを発表したことに見出せる。

### (4) 主体的・対話的な深い学びの実現

主体的・対話的な深い学びは、幼稚園から高校まで共通して使われている言葉であるが、幼児期は幼児なりの意味がある。

紙コップを使って糸電話を作り、作った糸電話で友達と遊ぶという活動では、紙コップという物へ興味をもって積極的に関わり、糸電話として友達の声伝える道具になることを理解した。友達と一緒に紙コップの糸電話で声を伝え合うことに喜びを感じ、友達と一緒に糸電話で遊びながら試行錯誤を繰り返すなかで、どうしたら糸電話で友達の声が聞こえるかを考えながら、自分の思いを伝えたり、友達の思いを聞いたりすることを楽しんだ。

糸電話を作って遊ぶ活動からの学びを整理した(図1)。

## 4. 小学校(1年生)の事例

### 4-1. 小学校(1年生)の授業概要

小学1年生の生活科の授業は次の通りである。

時期：Y年1月23日

対象：小学1年生44名(A組・B組)

本時の目標：地域社会の人々(大学教員等)と交流し、世界の文化・自然に興味・関心を持つこと。糸電話に興味を持ち、力を合わせて作ったり遊んだりすること。

本時の内容：小学校第1学年・生活科の学習概要(1年B組の事例)を整理した(表2)。

### 4-2. 小学校(1年生)の授業結果と考察

大学教員が自己紹介をする時に、けん玉を披露したり、ギターで「さんぽ」を一緒に歌ったりすることに対して、児童は興味を示していた。また、学生に対しても、自己紹介をする時に興味を示し、糸電話の制作や遊びに取り組んでいた。海外の国について、現地の写真を活用して紹介することにより、その国の文化や自然に興味を示した。特に、カンボジアの学校建設に取り組んだ話や現地の幼児が算数を勉強している時の写真を見せて紹介した時の反応があった。

授業プリントの振り返りで、「せかいの国に、きょうみをもったと思いますか?」の項目では、「とても思う」21人(48%)、「思う」15人(34%)、「どちらとも言えない」5人(11%)、「思わない」3人(7%)であったこ

とから、世界の国に関して、概ね興味を持つ授業だったと考えられる。また、児童の振り返り記述から、世界の国の景色、広さ、行事、遊び、自然に興味を示していることから、世界の国に関する知識を得ていたと推察される。

また、糸電話を作って遊ぶことで、興味関心を持ち、児童は音の伝わり方を学ぶことがわかった。特に、糸電話を複数で実施することで協同的な学びになりやすい傾向がある。また、2人だけでなく、大きな糸電話を用意し、より多い人数で取り組むことで、音の伝わり方について知ろうと興味や関心を示していたと思われる。

そして、「みんなの力を合わせて、とりくめたいと思いますか?」の項目では、「とても思う」26人(59%)、「思う」12人(27%)、「どちらとも言えない」3人(7%)、「思わない」3人(7%)という結果から、協同的・対話的に概ね取り組むことができたと推察される。また、児童の振り返り記述から、「糸でんわがたのしかった。」「糸でんわをしておきなやつをしたのがたのしかった。」「糸をピンとはったら、よく聞こえました。」「糸でんわがほんとうに聞こえたとおもわなかったです。」「糸でんわは、糸をはらないとき聞こえないということをしめました。」「あなをあげなくてもいいというやりかたがあるなんてしらなかったです。」という結果から、糸電話の制作、遊びの活動に興味を示し、音の伝わり方について知り、学んでいたことが考えられる。

さらに、現行の小学校学習指導要領(平成29年告示)における生活科の目標は、「具体的な活動や体験を通して、身近な生活に関わる見方・考え方を生かし、自立し生活を豊かにしていくための資質・能力を次のとおり育成することを目指す。」とあり、次の(1)～(3)項目を糸電話の内容について整理した(表3)。

以上のことから、授業の目標である「地域社会の人々(大学教員等)と交流し、世界のことに興味・関心を持つ。糸電話に興味を持ち、力を合わせて、作ったり遊んだりする。」に対して、世界のことを知る【知識・技能の基礎】、

糸電話の仕組みがわかる【知識・技能の基礎】、糸電話の音がどのような時に聞こえるのかを調べる【思考力・判断力・表現力等の基礎】、糸電話の伝わり方の違いがわかる【知識・技能の基礎】に関して、ある程度、達成することができたと考えられる。

## 5. 総合考察と今後の展望

### 5-1. アプローチプログラムと関連させて

幼稚園の5歳児の小学校の各教科における資質・能力とのつながりとして3点が挙げられる。

①糸電話の仕組みや特徴について興味や関心をもつ。

②身近なものを使って、遊びに使うものを工夫して作ることができる。

③自分の思いを伝えたり、友達の思いを聞いたりすることができる。

さらに、環境と生活科を関連させると、糸電話の糸をピンと張ると声が聞こえる、糸電話の糸を指でつまむと声が聞こえないという音の伝わり方について理解をすることは難しい。しかし、子ども達への伝え方の方法を変えることで、それらに興味や関心をもつことができるのではないかと考える。それが早期教育ではなく、小学校の生活科の学習へつながると推察される。

### 5-2. スタートカリキュラムと関連させて

生活科が重要なカギとなり合科的、他の教科とつながりをもたせたカリキュラムは、生活科・図画工作科・国語科が挙げられる。

### 5-3. 架け橋プログラムと関連させて

幼稚園と小学校の接続のためには、互いの学びの形態を理解しておく必要があり、幼稚園の5歳児と小学校の1年生の生活科の学びや学習を分析する意義がある。

幼稚園5歳児・環境と小学校1年生・生活科をつなげ、交流することができれば、以下のことが期待できる。

幼稚園の5歳児にとって、小学生と交流する

ことで、小学校における生活を知ることができ、不安が軽減される。小学生への期待と憧れを持ち、5歳児では理解が難しいことであっても、小学生と一緒に学ぶことで視野が広がる。

小学校の1年生が幼稚園の5歳児と交流することで、糸電話の方法を教える、お世話をするという経験から自信をもつことができる。

#### 5-4. まとめと今後の展望

本研究では、まず、円滑な幼小接続を目的とした「アプローチプログラム」と「スタートプログラム」とその二つを跨ぐ「幼保小の架け橋プログラム」の内容と目的について確認した。

つぎに、以前に取り組んだ幼稚園における実践研究の知見を踏まえた糸電話の制作・遊び活動の教材を計画・準備し、幼稚園5歳児と小学1年生を対象にした実践研究を実施した。実践結果について、この活動が保育内容5領域、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿、主体的・対話的で深い学びの実現につながるか、また、小学1年生「生活科」において育てたい三つの資質・能力である【知識・技能の基礎】【思考力・判断力・表現力等の基礎】【学びに向かう力・人間性等】の実現につながるかという観点から分析した。

その結果、幼児は、「協同性」「思考力の芽生え」「言葉による伝え合い」「豊かな感性と表現」この4つの育ってほしい姿と主体的・対話的で深い学びを活動の中で体現していた。将来、小学校での学びにつながると考えられる。

児童は、糸電話を制作し、それを使って遊ぶ活動を通して、育成目標である三つの資質・能力を次のように体現していた。糸電話の仕組みがわかる【知識・技能の基礎】、糸電話の音がどのように伝わるのかを調べて理解し工夫して操作できる【思考力・判断力・表現力等の基礎】、糸電話の制作と遊びに興味をもち、主体的・対話的な態度で友達と協力しながら活動できた【学びに向かう力・人間性等】であり、これらの資質・能力は幼小接続を目指したプロ

ラムにおいても有効に働くと予想される。

今後の展望としては、小学校の生活科において、この教材をもとにした児童と幼児が協同で活動するプログラムを実践する予定である。具体的には、幼児が十分にできない内容を児童が支援する形で幼小の協同的・対話的な活動内容を取り入れた糸電話の制作・遊びをするというプログラムを構想・計画・実践する。実践結果を評価し、「幼保小の架け橋プログラム」に寄与できるのかを検証していく。

#### 参考・引用文献

- 文部科学省(2018)『小学校学習指導要領(平成29年告示)解説【生活編】』
- 文部科学省(2018)『幼稚園教育要領解説』フレーベル館
- 文部科学省(2024a)『幼児教育と小学校教育がつながるってどういうこと?幼児教育と小学教育の円滑な接続のための参考資料』東洋館出版社
- 文部科学省(2024b)『小学校学習指導要領(平成29年告示)解説総則編』東京書籍
- 無藤隆編著(2018)『新訂 事例で学ぶ保育内容領域環境』萌文書林
- 田崎教子(2024)「音楽教育における幼保小連携・接続はどうあるべきか(1)―「音楽あそび」と「音楽づくり」から探る―」『帝京大学教育学部紀要』(12) pp.75-84.
- 辻誠・浦田雅夫・仲井勝巳・伊藤佐陽子(2025)「子どもの「意見表明」を育てる保育教材の実践研究:年長児に対する「糸電話の制作と遊び活動」を通して」『京都女子大学発達教育学部紀要』(21) pp.127-135.
- 山本素世(2019)「アクティブラーニングにおける環境教育プログラムの活用:大学,小学校,幼稚園での実践事例をもとにして」『奈良大学紀要』(47) pp.213-224.
- 柳原高文(2018)「『森のようちえん』における幼児の「アクティブ・ラーニング」および「生活科」とのかかわり」『名寄市立大学紀要』(12) pp.11-21.
- 湯川秀樹・山下史一監修(2023)『幼児期の教育と小学校教育をつなぐ 幼保小の「架け橋プログラム」実践のためのガイド』ミネルヴァ書房

#### 謝辞／付記

本研究を実施するにあたり、協力園の幼児、協力校の児童、教職員、関係の皆様からご協力をいただきました。ありがとうございました。

表1 幼稚園の5歳児の保育の概要

幼児の活動	指導内容	保育内容 5領域
<p>【①絵本『もしもしモモン』の読み聞かせをみる】 ○大学教員の話聞き、質問に答える。 ・「つながってるから」、大きい方がよく聞こえると答える。</p>	<p>・糸電話に興味をもてるように働きかけ、糸電話の仕組みに気づくように問いかける。</p>	<p>【環境】</p>
<p>【②紙コップ（大小1個ずつ）にシールを貼る】 ○大学教員等から紙コップを受け取る。 ・糸電話に興味をもち、紙コップを耳に当て話を聞く仕草をしたり、紙コップを口に当てて話す仕草をしたりする。 ・紙コップに興味をもち、紙コップを積んだり、紙コップを角に見立てたりする。 ○紙コップにシールを貼る。 ・紙コップにシールを貼る。 ・「これみて、わたしの」「いっしょじゃん」と自分の思いを言葉で伝える。 ・できた作品を見せ合い、「やったー」「かわいい」と、シールを貼ることができたという嬉しい気持ちを言葉で伝える。</p>	<p>・糸電話の準備のため、大小1個ずつの紙コップを配る。  ・コップに1枚ずつシールを貼るように言葉をかけながら配る。  ・シールを貼り終えると、全員で見せ合うように言葉をかけ、できあがったことを褒める。</p>	<p>【環境】【表現】  【表現】 【表現】 【人間関係】 【言葉】 【言葉】【表現】</p>
<p>【③紙コップにペンで好きな絵を描く】 ○ペンを使い、紙コップに好きな絵を描く。 ・ペンを握り、紙コップを固定して、自分の好きな絵を描く。 ・パンダ、クロミちゃん等、自分のマークや好きな絵を描く。 ・好きな絵を描き、友達や保育者に説明をする。</p>	<p>・幼児が絵を描きたいという意欲がもてるように励ます言葉をかける。 ・幼児の言葉に耳を傾け認める言葉がけをする。</p>	<p>【健康】  【表現】【環境】 【人間関係】 【言葉】</p>
<p>【④2人組になり、セロハンテープで紙コップと糸を繋げる】 ○大学教員の話聞く。 ・「おれ5こ、500こ、900こ、1000こ、60000000こ」と数の多さを競うように数字を言い合う。 ○セロハンテープで糸と紙コップを貼る。 ・セロハンテープを切り、紙コップに糸を貼り付ける。 ・セロハンテープを使うことが難しい友達の手伝いをする。 ・2人1組になり友達と協力をして2人で1つの糸電話を作る。</p>	<p>・4枚のセロハンテープを貼って糸と紙コップを繋げることを、見本を見せながら説明をする。  ・テープ台を安全に使用できるように見守る。  ・ペアになる幼児同士を確認し幼児へ伝える。</p>	<p>【環境】  【健康】 【人間関係】  【人間関係】</p>
<p>【⑤友達と2人組になり、作った糸電話で友達と話す】 ○糸電話で話す時の約束をする。 ・静かにする時は0、糸電話で話す時は1の声で話す。  ○友達と糸電話で話す、聞くの役割分担をしながら友達と話す。 ・友達と順番交替し、協力しながら友達と話す。 ・糸電話から友達の声が聞こえ、跳びあがって喜びを表現する。 ・糸電話の糸をピンと張ったり、糸を指でつまんだりして、友達と話す。 ・糸電話の糸が体に触れないように、自分の体の向きを変える。</p>	<p>・糸電話で話す時の声量を数字と図で説明する。  ・話す幼児と聞く幼児が順番に交替ができるように、保育者が仲介する。  ・聞こえた喜びを共感できるような言葉をかける。 ・幼児同士の距離を調整したり、糸を指でつまんだりして、糸電話の仕組みに気づくよう促す。 ・糸に触れないように幼児の体の方向を伝える。</p>	<p>【人間関係】 【環境】  【人間関係】  【表現】  【環境】  【健康】</p>
<p>【⑥大学教員の2つの質問に幼児が答える】 ○大学教員からの質問に答える。 ・聞こえた、聞こえなかった、「おおきいほう」「ちいさいほう」と答える。</p>	<p>・「糸電話の糸をつまむとどうなるか」「大きい紙コップと小さい紙コップではどちらがよく聞こえるか」と問いかけ、幼児が糸電話の仕組みに気づくようにする。</p>	<p>【環境】</p>
<p>【⑦活動の振り返りをする】 ○大学教員の質問に答えたり、友達と話したりする。 ・自分の声が伝わり、友達の声が聞こえて「うれしかった」「おともだちのこえがきこえてうれしかった」と答える。 ・糸電話で友達と話したことについて、「すきなどうぶつ」「もしもし」「おもったこと」「おえかき、たのしかった」と答える。</p>	<p>・活動を通して感じたこと、分かったこと等を共有できるように、友達と話し合う時間を設ける。 ・幼児からでてきた感情に共感する言葉がけをする。</p>	<p>【言葉】【表現】</p>

<p>ねらい</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・実施者や友達と一緒に糸電話を作ることを楽しんで取り組む。</li> <li>・糸電話の音が伝わる仕組みに興味や関心をもち、</li> <li>・友達の声を聞いた話したりすることを楽しむ。</li> </ul>	<p>主な活動</p> <p>友達と一緒に糸電話を作り、作った糸電話で遊ぶ。</p>
<p>【健康】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ペンを握り、紙コップが動かないように固定して、自分の好きな絵で描く。</li> <li>・指先を使って、テープからゼロハンテープを引き出し、カッターで切る。</li> <li>・糸電話の糸が自分の体に触れないように、体の向きを調整する。</li> </ul>	<p>【人間関係】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・紙コップにシールを貼り、「これみて、わたしの」「いっしょじゃん」と自分の思いを言葉で伝え、友達と喜びを共感する。</li> <li>・描いた絵を「みて」「みて」「みて」「クロミちゃん」と、友達へ説明をする。</li> <li>・ゼロハンテープを貼ることかできずに困っている友達がいたら、そのゼロハンテープを貼ってあげる。</li> <li>・友達と協力をして2人で1つの糸電話を作る。</li> <li>・話を聞かせる時は「0は静かにする」、糸電話で友達と話をする時は「1は小さな声で『もしもし』の声」で話すという約束をする。</li> <li>・糸電話で遊ぶ時には、話す、聞くの役割分担を理解して、自分で考えて行動する。</li> <li>・糸電話で遊ぶ時には友達の良い気づき、友達と協力する。</li> <li>・糸電話の糸をピンと張るために、互いの距離をとるように協力をしようとする。</li> </ul>
<p>【言葉】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・紙コップにシールを貼り、「これみて、わたしの」「いっしょじゃん」と自分の思いを言葉で伝える。</li> <li>・紙コップにシールを貼り、「やったー」「かわいい」と、シールを貼ることを伝える。</li> <li>・描いた絵を「みて」「みて」「クロミちゃん」と、友達へ説明をする。</li> <li>・友達の声が聞こえたり、自分の声が友達に伝わったりしたことが嬉しかったと言葉で伝える。</li> <li>・糸電話を使って自分が考えていることを友達へ話したり、友達が考えていることを聞いたりする。</li> </ul>	<p>【表現】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・紙コップに興味をもち、紙コップを積んだり、紙コップを角に見立てたりする。</li> <li>・紙コップにシールを貼り、「やったー」「かわいい」と、シールを貼ることができたという嬉しい気持ちを表現する。</li> <li>・紙コップにバンド、クロミちゃんなど、好きな絵を描く。</li> <li>・友達の声が聞こえた瞬間、跳びあがって喜びを表現する。</li> </ul>
<p>幼児期の終わりまでに育ってほしい姿</p>	<p>【協同性】 友達と2人組になり、糸電話を完成させるという目的に向って、それぞれが自分の担当する部分を完成させる。困っている友達がいれば手伝ってあげ、互いに完成を喜び合い、完成した糸電話で一緒に遊ぶ。</p> <p>【思考力の芽生え】 紙コップや糸電話に興味をもち、どうしたら糸電話で友達の声が聞こえるかと考え、繰り返しているいろいろな方法を試しながら、遊ぶことを楽しむ。</p> <p>【言葉による伝え合い】 糸電話を使って、好きな動物、楽しかったこと、思ったこと等、自分の思いを話したり、友達の思いを聞いたり、言葉で伝え合う。</p> <p>【豊かな感性と表現】 糸電話で友達の声が聞こえた瞬間には跳びあがって喜びを表現し、振り返りの時間には、「おともだちのこえがきこえてうれしかった」とクラス全員に嬉しかったことを言葉で発表する。</p>

図1 糸電話を作った遊ぶ活動からの学び(幼稚園)

表2 小学校1年生の生活科授業の概要

児童の活動	評価規準
<p>【大学教員と学生の自己紹介】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・大学教員と学生のことを知る。</li> </ul> <p>【世界のことを知ろう】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・世界の自然や文化を知る。</li> </ul> <p>【糸電話を作って遊ぼう】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・糸電話の遊び方を知る。</li> <li>・糸電話の声の大きさ（レベル0～3）を確認する。</li> <li>・糸、紙コップ、セロテープで糸電話を作る。</li> <li>・どんな時に、音がよく聞こえるのか考える。</li> <li>・ペアや班で取り組む。</li> <li>・糸電話の音の伝わり方を確認する。</li> </ul> <p>【学習の振り返り】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ワークシートに気づいたことを書く。</li> <li>・分かったこと、気づいたことを発表する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・大学教員と学生を知る。【知】 学校近隣に大学教員や大学生がいて、実習やボランティア、学習などで関わることを知る。</li> <li>・世界の自然や文化を知る。【知】 「景色がきれい。」「世界は広い」「世界には色々な行事や遊びがある。」「モロッコには砂漠がある」など</li> <li>・糸電話に興味を持つ。【思】 糸電話を作ろうとしたり、遊ぼうとしたりする。</li> <li>・糸電話を作り、仕組みがわかる。【知・技】 「糸をピンとはったら、よく聞こえた。」「小さな声でも聞こえた。」「あなをあげなくてもいいというやりかたがある（セロテープでも可能であること）」など</li> <li>・糸電話で聞こえるかどうか伝え合う。【思・判・表】 「聞こえますか？聞こえたら手を挙げてください。」「たくさんの人としてみよう。」など</li> <li>・糸電話の楽しさを友人や家族と共有しようとする。 【学びに向かう力・人間性等】</li> </ul>

表3 糸電話を作って遊ぶ活動からの学び（小学校）

<p>(1) 活動や体験の過程において、自分自身、身近な人々、社会及び自然の特徴やよさ、それらの関わり等に気付くとともに、生活上必要な習慣や技能を身に付けるようにする。【知識・技能の基礎】</p>	<p>糸電話の制作・遊び活動を通して、自分自身のことを友達に紹介したり、友達のことを知ったりすることで、その良さに気づくとともに、自分のことを伝える、相手のことを理解するといった生活上必要な習慣を身に付けたり、糸電話を制作することができたり、仕組みを理解したりすることが期待できる。</p>
<p>(2) 身近な人々、社会及び自然を自分との関わりで捉え、自分自身や自分の生活について考え、表現することができるようにする。【思考力・判断力・表現力等の基礎】</p>	<p>糸電話の制作・遊び活動を通して、自分自身の生活（朝ごはん、何を食べたかなど）を紹介したり、友達的生活を知ったりし、具体的にお互いのことを糸電話で話すことで、考えたり、表現したりすることができる。</p>
<p>(3) 身近な人々、社会及び自然に自ら働きかけ、意欲や自信をもって学んだり生活を豊かにしたりしようとする態度を養う。【学びに向かう力・人間性等】</p>	<p>糸電話の制作・遊び活動を通し、身近な友達に働きかけ、友達のことに関心を持ったり、自分の考えや思いを持って言葉で話したり、糸電話がしっかりと聞こえるように糸をはって聞こえるように取り組んだりすることができる。</p>